

令和7年度 第1回 弘前市総合教育会議 会議録

日時 令和8年1月29日(木)
午後3時00分～午後4時10分
場所 岩木庁舎2階 多目的ホール

◇議事日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
○協議事項
「みらいの健康」に係る教育環境の充実について
- 4 閉会

◇出席者

弘前市長 櫻田 宏、教育長 吉田 健、教育長職務代理者 日景 弥生、
教育委員 村谷 要、教育委員 齋藤 由紀子、教育委員 伊東 重豪

◇司会及び説明のため出席した者の職氏名

教育部長 森岡 欽吾、学校指導課長 工藤 利彦、学務健康課長 原 直美、
教育センター所長 前田 清幸

◇その他出席した者の職氏名

学校教育推進監 福田 真実、教育総務課長 高谷 由美子、
学校整備課長 安田 広記、生涯学習課長 中川 元伸、
中央公民館長 高森 紀之、高岡の森弘前藩歴史館長 熊谷 義昭

午後3時00分 開会

○市長(櫻田 宏) 令和七年度弘前市総合教育会議の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。皆様には、ご多用のところご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から、教育行政はもとより、市政各般にわたり格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

本会議は、教育のあるべき姿や課題を市と教育委員会が共有し、連携を深めながら教育行政の推進を図ることを目的に開催するものであります。

本日の会議は、「みらいの健康に係る教育環境の充実」を協議事項とし、皆様と率直な意見交換をさせていただきたいと考えております。

「みらいの健康」は、弘前市総合計画後期基本計画のリーディングプロジェクトの一つに位置づけ、地域の未来を担うひとづくりを目指すものとして掲げております。地域の未来を担う人材を育てていくには、子どもの頃からの教育環境はとても重要なものであります。

本日、この会議で皆様からいただきますご意見などを参考に、引き続き、子どもたちの学びを支える環境整備を進め、「みらいの健康」の実現に向け、取り組んでまいりますので、皆様には、なお一層のご理解とご協力を賜りますようお願いを申し上げます。限られた時間ではありますが、実りの多い会議となりますよう、ご協力をお願い申し上げまして、挨拶といたします。

○市長（櫻田 宏） それでは、議事に入りたいと思います。本日の協議は、「みらいの健康」に係る教育環境の充実について、3つの視点で意見交換したいと思います。1つ目は「総合的な『学ぶ力』の向上」について。2つ目は「健康教育の推進」について。3つ目は「不登校・不登校傾向にある児童生徒への対応」についてであります。まずは、これらについて、事務局から話題提供をお願いします。

○学校指導課長（工藤 利彦） 話題提供の1番として、総合的な「学ぶ力」の向上について、話させていただきます。この視点を作る内容として、非認知能力に着目したものであります。資料の1、（1）をご覧ください。非認知能力とは、テストの点数などで測定できる認知能力に対し、粘り強さや、主体性、共感力といった、数値では測りにくい力のことを指します。教育委員会ではこうした非認知能力を認知能力と切り離して捉えるのではなく、両者を一体のものとして「学ぶ力」と位置づけ、弘前市の子どもたち一人一人の向上を目指しています。

非認知能力は、これまでも「徳育」や「心の教育」などとして大切にされてきましたが、AIをはじめとする科学技術の進展や、社会の変化が激しく、将来の予測が難しい時代を迎える中で、その重要性は一層高まっています。平成29年度改定の学習指導要領においても、「学びに向かう力、人間性等」として、育成すべき資質・能力の一つに位置付けられています。

非認知能力の育成に当たっては、伸ばしたい力を子どもたち自身が意識し、振り返ることが重要であるとされています。そのため、授業や学校行事、部活動など、学校教育全体を通して、自己認識や自己調整を促す機会を意図的に設けていくことが大切であると考えています。例えば、授業において主体的に学習に取り組む力を育んだり、部活動において目標に向かって努力し、困難を乗り越える経験を重ねる中で、忍耐力や向上心といった非認知能力を育んだりすることなどが考えられます。

資料（2）「主体的な学び」と学力をご覧ください。これは、左側のグラフ

の方にもありますように、令和7年度全国学力学習状況調査、小学校の5年生、算数における正答率について、その下の四角囲みのなかにあります、「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」、この自分から取り組んだという部分が、主体的、主体性に関わる部分と見まして、この両者の間での相関をまとめたものでございます。この例から見えることとしては、非認知能力を高めることは、子どもたちの自尊感情の向上や、学習意欲の喚起につながり、結果として学力の向上にも寄与します。さらに、将来における進学や就職、人間関係の形成など、人生の様々な場面においてもプラスの影響をもたらすことが指摘されています。

教育委員会としては、非認知能力の育成を通して、子どもたち一人一人が将来にわたり、しなやかでたくましく豊かな人生を歩んでいくことができるよう、引き続き学校の取り組みを支援していきたいと考えております。

本日の説明内容や、非認知能力に係る教育委員会の取り組み、今後の構想等につきまして、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

○学務健康課長（原 直美） 弘前市で行っている健康教育のうち、当課が行っている取り組みについてご説明いたします。

まず、健康教育コアカリキュラムです。資料の図をご覧ください。これは弘前大学の中路先生が作成したものとなっております。市では小学校6年生、中学校2年生で1コマ以上この図を使用した授業や組織活動、周知活動を組み合わせて取り扱うこととしております。また、この授業の際には、ベジチェックや血圧計で自分の健康にかかわる数値を測定することも推奨しており、ベジチェックは全市立小中学校でその測定を実施し、野菜摂取の動機付けにもなっております。

現在、保護者の方には測定についてのお知らせを配布するほか、児童生徒に対しても測定結果を記入し、その内容について説明した用紙を配布しており、自分の野菜摂取量の目安が視覚的に判るので、児童生徒が改善を目指して取り組むきっかけづくりになっております。今年度は、小学校の取り組み例としては数値の良い児童に野菜摂取の秘訣を、児童同士がインタビューして紹介する事例などが報告されており、効果的な活用がされていると考えているところでございます。

その他にも、歯科の健康のため、令和6年度からは全市立小中学校においてフッ化物洗口を行ったり、専門家による健康教育講座として、医師や薬剤師を講師として派遣し、小学校高学年には、飲酒・喫煙防止などに関する指導、中学生には性に関する講座などを行っているところです。

食育・学校給食としては、給食センターの栄養教諭が中心となり、地域の特産品や郷土料理を活用した指導等を行っております。また、良い生活習慣の

定着のため、肥満傾向にある児童生徒に対し、栄養教諭が食生活と運動の大切さを意識づける指導を実施するなどの取り組みも行われているところです。

当課以外でもさまざまな健康教育が行われており、市の健康教育の取り組みについては、児童生徒の心身の健康を守る人の健康の実現のほか、小さいころから健康教養を獲得し、自分と家族の健康寿命を考えられる人材の育成という、未来の健康につながるものとして、今後も推進してまいりたいと考えているところです。説明は以上となります。

○教育センター所長（前田 清幸）　まずは、不登校にかかる児童生徒の現状です。弘前市立小・中学校における不登校児童生徒数は、100人あたりに換算いたしますと、令和4年は2.9人、5年は3.2人、6年は3.4人と増加傾向にあります。この傾向は全国と同様となっております。毎月各学校に提出を求めている、不登校等に関する調査項目を変えたことから、今は保健室や余裕教室の、いわゆる別室登校、登校を渋ることによる遅刻が多かったり、登校はするものの、短い滞在時間で帰宅したりするなどの、不登校傾向にある児童生徒も、同程度いることが、把握できるようになりました。

続きまして、関連する課題を3点述べます。

1点目です。県のスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー派遣事業、弘前市の心の教室相談員の配置事業、このほか、各学校においては、年複数回の教育相談等を行い、心の疲れ、変調に気付けるように努めているものの、本人が抱える悩みのほか、取り巻く学習環境、家庭環境、社会全体の影響などが複数絡み合っている場合が多いことで、不登校に至る原因の特定は難しくなっているということがあります。

2点目は、不登校のマイナス面のイメージを強く抱いてしまう保護者が、必要以上に重大であることと捉えてしまい、一人で問題を抱え込んでしまっているのではないかという懸念があるということです。

3点目は、不登校児童生徒への対応として、各学校では、保健室や別室登校などという形で工夫を凝らしているものの、そういった場に配置する教員がないということです。課題としてはこの3点が挙げられます。

不登校児童生徒に対する、弘前市が行っている対応の一つとして、フレンドシップルーム事業があります。保護者、学校とも十分な連携をしながら、活動を短時間に制限し、無理のない形で集団生活へ復帰できるような支援を行っています。令和7年12月現在で、小学生が13名、中学生が22名。心を安定させ、安心できる環境へ通室しております。フレンドシップルームは、弘前市総合学習センターに開設しておりますが、遠隔地の児童生徒に対し、通室のきっかけとなったり、通室機会を広げたりするために、中央公民館岩木館で、年3回、サテライトデーを開催しているところです。教育センターからの

説明は以上です。

○市長（櫻田 宏） 事務局から、今日の協議事項3点についてすべて通しで説明をしていただきました。意見交換については各項目ごとに行っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

まず1つ目の、総合的な「学ぶ力」の向上について、意見交換をしたいと思っております。ただ今の説明を受けてですが、説明の中にもありますとおり、数字などで測定しにくい非認知能力を高めることは、子どもたちの自尊感情の向上や、学習意欲の喚起に繋がり、結果として学力の向上にも寄与するというものであります。教育委員会としても、この「非認知能力」の育成にも注目しているということですが、今回は、いわゆる「総合的な学ぶ力」の向上についてどのようにして進めるべきかなど、皆さんからご意見を伺いたいと思っております。

まずは教育長から。

○教育長（吉田 健） 미래の健康を考えるうえで、3つの視点ということなのですが、教育委員会としては、「学ぶ力」が一番重要かなと考え、真っ先に取り上げていただきましたけれど、この学力、非認知能力、認知能力を含めた考え方というのは、実は新しいものではなくて、10年以上も前から、やっぱりペーパーテストで測れる認知能力、これはテストの結果を見ればすぐわかるわけですが、それ以上に、粘り強さだとか、コミュニケーション能力だとか、誠実さだとか、社会に出て役立つそういったペーパーテストでは測りにくいんだけど非認知能力というのは非常に大切だと言われていたんですが、なかなか目に見えないそういったものが実際にはまだ一般的じゃなくて、やっぱり頭の良い子というのはテストの点数が良い子みたいに思われている、そんな考え方が根強く残っているのが現状かと思っております。けれども、ここ最近、実際いろんな研究が進んで、この非認知能力の研究というのが非常に進歩しています。その中で、テストの点数は訓練したり、学習したりすれば伸ばすことができるんだけど、この非認知能力も実は学習とか訓練とか、特殊な方法を使ってやれば、十分に伸ばすことができるんだという実験結果というのが報告されて、これで俄然注目するようになったのかなと考えています。実際これを教育委員会で取り上げようとしたきっかけというのは、2年ほど前になるんですが、高校の先生たちと話をしていたら、今大学入試が大きく変わって、今までは、テストの点数が良ければ、一流に入れたんですが、総合型選抜で、やっぱり勉強だけではもうついていけないという、だからこの非認知能力をなんとか伸ばさなければならぬというのが、全国的な傾向だという話を聞きまして。そのなかで、高校からだ遅いという意見が多いんだと。中学校、小学校そのくらいからやったらどうですかという話を聞いて、あ

あこれはいいものだというので、当時第一人者といわれる先生を紹介していただいて、弘前に持ち込んだというのが、去年の話です。教育委員会というよりは、学校の先生たちが非常に食いついてきて、これはいいものだというので、学力イコール認知能力だったんですが、あえて今回、総合的な学力という言い方をしましたけれど、非認知能力も合わせたこの両方とも鍛えていかなければ、社会に出た時にこれからの未来を担うような人材が育たないだろうという考え方から、両方で攻めていこうということで、今、学校指導課が中心に、やっているところでございます。今後もこのような考え方、いろんな方法がまだ開発中だということで、いろいろ情報を集めながら、弘前の子どもたちに何とか、非認知能力も付けさせていただき、そのようにしていきたいと考え、今進めてるところなんです、このような大きな方向性は、委員の方から、いろんなご意見いただければなと思っています。

○市長（櫻田 宏） ありがとうございます。今教育長からお話がありましたが、皆様から続いてございませんか。

○教育長職務代理者（日景 弥生） 今、教育長がおっしゃったとおりだと思いますが、ただやっぱり、子どもたちの、ある程度基礎学力ですね、つまりここで書いてあるのは、知識とか技能とかというようなことになるかと思いますが、それが無いと、非認知能力を高めるところになかなか結び付かないように思うんです。ですから、特に小学校段階であれば、知識・技能というのはかなり重点が置かれていると思いますが、そこをしっかりとやることで、中学校にそれが続いていく訳ですから、これは無視できないかなと思います。それで、子どもたちがいろんな場面で自信をつけることで非認知能力に繋がるのではないかなと思います。だから学校現場では、その知識・技能等を充実させることはもちろんですが、それをうまく使って、少し応用的なっていうかな、そういう学習が展開されて、子どもたちが持っている力をちゃんとそこに結びついてかつ、向上させるような場面があれば、この非認知能力、結果的には、総合的な学ぶ力になると感じます。

このデータの中に、小学校の算数のグラフがありますけれども、自分から取り組んだという、主体的にとか、自発的にとことなので、やっぱり、そういうのは当然このようになるだろうなって予測できる場所ですね。そういう子どもたちをどうやって増やしていくかというのは、意見交換ができたらおもしろいなって思います。

○教育委員（伊東 重豪） 非認知能力、いわゆる認知能力の学力とイコールかどうか、一緒に育っていけば、かなり人間の完成度として高まるんでしょうけど、ある程度は、いわゆる学力は無いんだけど、人生の渡り方がうまいとかですね、そういったところでも非認知能力発揮されて、両方あれば良い

んですけど、こういった非認知能力に非常に長けてて、やっていけるという所もあるんじゃないかな。二つの能力で、学力も高い人もあれば、こういった非認知能力、コミュニケーション能力とか、いろんな能力が高い方もいるのかなあと、そういうことも思うんですけど。今、カリキュラムの中で、学力の設定がされてますので、この非認知能力を高めるのも、やはりかなり難しいでしょうし、それを今のカリキュラムの中にどう組み入れていくというのか、学校指導課で、だんだんと考えてくれてるんじゃないかと思うんですけど、なかなか難しいですし、やはりこういった人生の能力の高め方ってというのは、その場の社会環境とかで学んでいくというか、あるいは家庭環境で親御さんが非常にプロセスを褒めてあげるとか、遊びを大切にするとか、失敗から学ぶとか、感情にラベルを張って励ましてやるとか、いろんなことが非認知能力を高めるためのものとして、言われてるようなんです。なかなかほんとにこの学校教育だけで高めれるものなのかなというのがあるって、社会の場とか、コミュニティの場とか、家庭の場とかで育成されていくようなものなのかなと思います。主体的な学びというのは、好きなものには伸びていきますので、やっぱりそれが一番なんですよ。興味を持って自分でやっていけば、伸びるのは必然的なもので、それはいままでの学習システムと同じで、ちょっと非認知能力とはまた、それもあるんですけど、また別個の面もあるのかなというように認識して、うまく学びと非認知能力が一体化していけば、いい人間形成ができると思っているんですけど、方法論としてはかなり難しいのではないかなという懸念ももっております。

○教育委員（村谷 要） 非認知能力、教育長からも委員からも申し上げましたけれど、最近特に教育委員会の中で聞いて、言い方が難しいので、非認知能力って、難しそうな感じはしていたのですが、実はそんな難しい話ではなくて、昔から言われている話なんだけど、教育長からもありましたけれど、昔からあった話で、私が小学校で習った先生は、そういうのに長けた先生で、5年生、6年生の担任だったんですけど、常に好奇心、興味、好奇心を引き出すのが、とても上手な先生でした。好きなもの、好奇心があるとどんどん取り組んでいくのは、子どもは特に早いので、そういうのが昔からあって、教育委員会なんかで、学校訪問、授業参観する中で、それが非常に巧みな先生がいたりするんですね。結構、興味、好奇心を引き出す授業のやり方。そういう授業って、生徒たちが参加していきやすい。その中で学習してるのはすごくいいなと思いました。実はこれ、小学校、中学校、高校、大学、実は企業に入っても、行われている訓練があるんですね。好奇心や興味が、売れる商品を作るためには、絶対必要なものなんですよ。商品開発のために、デザインを決めるとか、そういうときにどう考えるのか、よく使われるのが「三不」という言い方。商

品開発とか製品開発とかいろいろなところでよく使われますけど、これ不思議だなんて思ったら、ひっくり返すと納得できるという仕組み。不満というのは、こうやったら満足できるよねという考え方。もう一つは不安。不安で無くするためにはどうすればいいか、安心できるにはどうすればいいかという三つの不をひっくり返すことによって、あらゆる商品の開発って、結構みなさんこの社会の中でやっていることなんです。小学校でももう、実は授業参観見ると、授業の中でやってる先生って、意識してないにしてもやってるんですよね。興味とか、好奇心をどうやって引き出すか、おそらく非認知能力って言っちゃうとなんだらうってなるんですが、もう少しわかりやすく言うと、中にも、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション力とかあります。そういう能力をどう引き出すかと言ったときに、不満。なんで不満なんだらう。満足するためにはどうしたらいいんだらうというのを考える課程だったり。不思議だな。これは納得するためにはどうやったらいいかと、ほんとに学習の原点みたいなのが、ずっと繋がっているんだらうという、そういう授業というのは、線引かなくてもやってる先生はいる。学校で参観した時にやはり、うまいなと思う先生は、何名かいらっしゃる。そういうのを皆さん共有できればいいんだらうな。そういう感じがしてそう難しく考えなくても、学ぶ力を持って、好奇心・興味があれば、子どもは絶対、間違いなくのめり込むので、そういう環境づくりをしてあげたらいいんじゃないかという気がします。

○教育委員（齋藤 由紀子） この資料の表を最初に見た時に今、正に自分の息子が高校受験で、この力全てを総動員して、頑張らなければいけない時だな、とに感じました。学力を身に付けるには、自分の中を見て反省したりしながら、自分を高めて頑張っていかないと点数もあがらないですし、そういう意味で、認知能力も、非認知能力も受験を通して、学校の先生方からの励ましをいただいて、もっともっと高めている時期なのかなあという風を感じました。それを学校では本当によくやってくださっているんですが、家庭で、じゃあ、何をしたらいいのかなと私が考えた時に、やはり今、昔から言われていることではあるんですが、早寝早起き朝ごはん。これは健康の方にも関わってくると思うんですが、ますます大事さ、重要さが増していると思うんですよ。早く寝ることって、大人も含めて難しいですし、しっかり朝ごはんを食べて向かうことで、学校でも勉強やいろいろな活動ががんばれますし、そういったことをまた改めて、学校の方でも保護者に対して、大事さをアピールしていただいて、学校と家庭と合わせて、子どもの力を高めていくことができれば、さらに良くなるのではないかなと感じました。

○市長（櫻田 宏） 先日、名誉市民の藤野道格さんにご講演をいただいたのですが、その時に、自分は弘前の小学校2年生から高校3年生までの間で、忍耐

力と求心が身についたと。これは弘前で育めた、と言ってたんですよ。そういう風土があることによって、学校現場、家庭でも意識することができれば、認知能力だけでは測れない非認知能力という大事なものがあるので両方進んでくるかなと思います。親って、叱るというのか怒るって言うのか微妙なところがあるじゃないですか。社会の中で叱られるかどうかって、いろんな能力を身に付ける機会があるので、学校現場のみならず、そういう地域の大人が、子どもたちを叱るようなことがあって成長していく機会が増えればいいのかなというふうにも考えています。また総合的な学習能力の中で、認知能力のほうは、最近デジタル化でパソコンでやるじゃないですか。昔は書いたことはしっかり記憶に残っていた。今はこれで記憶に残ってるかどうかなんです。議会答弁も作ったりするんですけど、そんなに記憶に残っていない。書いてるときは、原稿見ないで全部言えたんですけど、これになってからは、なかなかそうならないのはなぜかというふうに思っています。人間には素晴らしい能力というのがたくさんあるんですけど、ごく一部しか使っていないと。認知能力の中でもごく一部しか使ってなくて、いろんな、昔は天文学から、いろんなことから、すべて身に付けていたわけですよ。機械に頼ることによって、特にこれからはAIに頼ることによって、せっかく持っていた能力を失うのではないかなというのを私は心配なところがあります。そこを含めて、子どもの時から、スマホだけではない、情報収集もできるような能力、機会があればいいなと思います。

○教育長（吉田 健） 認知能力と非認知能力が別物だという説明になってしまったんですけど、結局一体なんですよ。なかなか、これはこれって分けることができないので、親子関係も含めて、部活動だとかも含めて、いろんなことが関係しあっているんで、どんどんいろんなことを経験させるっていうことに尽きるんだと思います。今、市長がおっしゃったデジタル化、大きな波なので、それを利用すればすごく効率が良いので、良いところはいいんですが、失うところは結構あるわけですよ。漢字覚えなとかですね。ですから、そういったところ、デジタルもアナログも両方やっていくというのが、これから求められる、まさに未来の健康論、頭の健康に繋がるのかなと、しみじみと感じます。

○市長（櫻田 宏） 怒られるんでなく、叱られるのは、先生もちゃんとそれわかって。叱られるのは成長ですから。社会に出てから叱られると会社辞めますから。

○教育委員（村谷 要） 叱ってくれる先生がきちんといるって言うのは、やっぱり叱るっていうのは、先生のパワーも要りますからね。やってくださるっていうのはすごく良いことだと思います。

○教育長（吉田 健） 怒りながら、きっとそれ愛情があるからということで伝わるまで、そこら辺もやはり、教師は見習わなきゃならないのかなっていう気がしますね。

○市長（櫻田 宏） 全員が、親も、地域の方々も先生であり、でも先生も地域の方であり、親であるという、境目はなく、いろんなことに接することができれば、良いのかなという感じもします。

2つ目の項目に入りたいと思います。

2つ目の協議の視点は健康教育の推進についてであります。事務局からは、学校でのコアカリキュラムやベジチェックについての話題提供がありました。弘前市でのベジチェックの測定率、全国でも珍しい高測定率となっており、市民の健康についての意識も高まっていると感じております。ここでは子どもの健康教育について感じていることなどをお話いただければと思います。

○教育長（吉田 健） 健康教育、中路先生がここにカラーで出ている、人の一生、健康の一生について表にしてわかりやすく書いていただきました。この内容は、実は絵だけがあるんですが、そこにいろいろなエピソードとか、血圧測定だとか、そういうのも組み合わせで健康について、今は健康だからあまり感じていない食事のこととか、これがいずれ大変なことになりますよというような話を進めているということで、一時期、弘前は健康コアカリキュラムを中断した時期もあったんですが、どんどんまた健康教育に力を入れていくというのが、学務健康課の考え方です。これに関連して、ベジチェックというのが、実は高校の方でもベジチェックの機械を貸してくれということで、たまたま小中学校で使っている機械が空いていた時があったので高校に貸したんですよ。それは弘前中央高校なんですが、非常に評判が良いということで、他の学校からも問い合わせがあったんですが、うまくマッチングして、小中学校で空いているときには、どんどん貸し出すこともあるよというような形で。同じようなやつは大学で、もう中学生の体験とかをやっているの、そういうときにも紹介したいという話もあるので、小中学生だけではなくて。学生っていうのは飛びつくのが早いので、どんどん広げていけば、非常に良い傾向かなと思っています。

もう一つ、歯のことなんですけど。歯に関して注目しているのは、万病のもとなので、これはすごく効果を上げています。

○教育長職務代理者（日景 弥生） とても面白い取組で、ベジチェック、私も、2年くらい前、やってみて、標準より高い数値で、おいしいぞ。みたいな感じで、自分のは確認したんですけど、だからこれはいいと思いますし、特に（2）番のところで、お知らせが各家庭に行って、家庭で話題にしてもらって、これ大事なんじゃないかなと思うんですね。子どもたちが学校でやるだ

けで終わると、そこの中だけで終わって、つまり、子どもたち自身は食生活に関しては、受け身の人間なので、つまり与えられてる食事なんですね。ほとんどは自分で作るわけではないので。ですから、家庭で話題にできるってことはすごく大事なことだなって思っています。でも一方でですね、ちょっと気になったのは、ベジタブルだけでいいのかなって、すごく気になって、もちろんこのベジチェックは肯定してますが、私の中では、たんぱく質とか、無機質、特にカルシウムは日本人が不足している栄養素の一つとずーと言われてるので、ベジチェックだけじゃなくて、もうちょっと拡大できないかなっていう風に思う所です。少し余談ですが、学校給食は管理栄養士の方とかをはじめとして、かなり望ましい献立になっていると思うんですね。けど子どもたちにとって、給食だけはかなりいい食事だけれど、朝ごはんを食べていないというデータもかなり多いですし、「夕飯じゃあ何食べてるの」って聞くと、必ずしも家庭によって望ましい食事ではない場合があるかもしれないんですね。たんぱく質に関しては、あまり年齢関係なく、必要量がほとんど同じなので、そこはちょっと注意していただきたいなど。

○教育委員（伊東 重豪） 私も全く同感で、ベジチェックというのは、きっかけで良いと思うんですね。そういった食育、食の健康に目を向いてくれるきっかけで、あと興味が向いたら、それなりに段々調べだして、自分で少し進展していけばいいし、特に学童、幼児に関しては、一番好き嫌いが出てくるのは野菜が出てきますよね。やはり食べないのが多いので。そういったところもこういったもので、興味を持って、食べればって言うようなことをやっていくきっかけだけになるんじゃないかと思います。この健康教育、文武両道じゃないんですけど、学問だけでは、健康を伴わなければそれが成せなくなってくる。変な話ですけど、私の先祖で養生学というのを提案した、先先代、先々代がいるんですけど、精神を鍛えること、学力を含めて、と並んで、体の健康が伴わなければ、きちんとした人間形成にならないといったところが、弘前でも目指す、この健康教育。また中路先生が短命県返上のために取り組んでいるところじゃないかと思うんですが、やはり働き盛りの壮年期があたったり、心臓の病で倒れてしまうともうそこで、その人の能力、道半ばで終わってしまうので。現在問題になっているのは、児童の肥満とか、ベジチェックだけにしても、そっちの肥満とかの問題が伴わなければ、やっぱり食事全体の内容だと思うんです。ベジタブルだけじゃなしに、バランスの摂れた食事というのは家庭から作られるものだと思うので、根っこの所は家庭環境だと思うんですね。両親などの健康の食育に対するような知識の広がりというか、そういうものがきちんとできて、あとは肥満に対する、よく食べて良いんじゃないと言ってあげたいですけど、ほんとにぶくぶく太ってくる子で、肥満

の学童というのもどんどん増えてきてます。全世界的な問題だと思うんですけど、そういったところを合わせて、それは生活習慣病の将来的な予防に繋がると思いますので、少しこういったベジチェックをきっかけにして、いろいろ広げたいうえで、家庭から見直すようなそういった食。できれば親御さん含めて、我々もなかなか時間とれないんですけど、子どもと一緒に、親御さんも聞いてくれれば、より一層よろしいんじゃないかなというところは感じてました。日景先生の言うとおりで、ベジタブルだけではなくて、全体見てなんだ、と思うんですけどね。

あとは、ちょっと足りなかったんですけど、運動のほうは、日本は全世界に先駆けて、すごい運動習慣っていうのは、大人におけるもので、すごく低いので、やっぱり習慣的な運動意識っていうのは、子どもの頃の、この2番目にあるような、学級単位での朝マラソンとか、縄跳びとか、運動習慣つけることは、大人、我々においてもですけど、すごく、欧米に比べると、運動習慣というのが無いので、社会に出て働いてしまうと、運動習慣つけようとしても、仕事に忙殺されて、忙しくてできないよというのがほとんどですから、若いころから持続的な運動を心がけられるようなのもひとつの方法なんだと思います。

○市長（櫻田 宏） 「あと10分、今より多く体を動かそう。あと70グラム野菜を摂ろう、年一回、健診を受けよう」と3つを市民の皆さんにお願いしているところですが、おっしゃるとおり、たんぱく質もバランスいい食生活になればいいんですが、一番は、今ベジチェック入れたのは、野菜嫌いというのが結構多いじゃないですか。特に緑黄色野菜嫌いで、350グラムのうち120グラム緑黄色、淡色は30グラムということの、家庭では会話にならない訳なんですけど、子どもたちにベジチェックをやって、ベジチェック大会みたいな、自分で5.5から7.2になったとか、大騒ぎしているようなことが、家庭に持ち帰ってもらって、話題にしてもらおうと、家庭の中で健康について、野菜もだけど、たんぱく質もだし、カルシウムもというような話になっていくことが、少しでもそういう家庭が増えていくことを目指して行ければなと。というところで今、ベジチェックを小中学校から、今高校にも貸し出しています。市内の市役所、まちなか情報センターなどにも置いています。結構市内にちりばめながらやりましたので、たぶん認知度的には全国で一番。ベジチェックという言葉の認知度は高いと思います。

○教育長（吉田 健） 結構スーパーでも、廻っていつているんじゃないですか。

○教育委員（齋藤 由紀子） 学校から家庭への、数値を書いた紙を持ってきて、これを話題に子どもと話すことができました。この子どもの数値の隣に、保護者覧というのがあるといいなと感じたんですけども、私も子どもと楽しく競いながら、ベジチェックを活用させていただいて、測ったこと

で、どれくらい足りていないかということが目に見えて数値化してわかってきたので、それから家でも野菜を摂る意識というのが高まりました。特に緑黄色野菜、子どもの苦手なものが多いんですけれども、足りていないという意識があると、残さなくはなりましてし、野菜をたくさん摂るためには、やはり新鮮でおいしい野菜を食べたいと思いますので、県産品を選んだり、新鮮なものを買ったり、家庭でも多く野菜を出すように、食べるようにとはなりましたので、すごくいいきっかけをいただいたなど、感じています。

- 市長（櫻田 宏） そのような感想をいただくとやりがいがあります。
- 教育委員（村谷 要） 市立病院の跡地でどういう事をやろうとしているのかを含め、気になってました。
- 市長（櫻田 宏） あそこは健康づくりのまちなか拠点になります。健康づくりに関しての様々な情報の発信、今調整中ですが、医師会と一緒にあって、医師会もそこに入ります。看護学校もあそこに入っていきます。
- 教育委員（村谷 要） 非常にいい組織になるんじゃないかと思いますね。
- 市長（櫻田 宏） 障がい者の福祉関係もそこに入っていきます。いろいろな方々と接する機会の増える窓口となっていきます。
- 教育委員（村谷 要） 一つ提案ですが、りんごミュージックの樋川さんと話して、あそこに誰でも入ってもいいよねと思ったんですよ。そういうのを繋がっていくためのフォーラムあってもいいよね。あまり堅いだけではなく、りんご娘って、そういうりんご、農業、米、リンゴ農家を応援することもやっている。
- 市長（櫻田 宏） 調整が難しくても、それが来るときというようなタイミングを作るのは、十分できると思います。場所が設備に部屋がいっぱいありそんな感じなんです、スペースが結構足りなくてですね。
- 教育委員（村谷 要） そういう展開を樋川さんも望んでいると思います。田舎の方に行っちゃうと、なかなか来る人が少ない。
- 市長（櫻田 宏） 例えば、土手町の通りってたくさん空き家があります。いろんなのが入っていけばいいと思ってるんです。街に出かけると、これやって、あれやってこうして、こうしてっていうふうになっていくと、歩く人が増えて、賑わいになっていくかなと。その間、何歩、歩くかってわかるわけですよ。これを何分で歩くか、何秒で歩くかというのを情報提供すると、この音楽が流れているうちにここまで歩き切ると、どのくらいのスピードで歩いたかというのが出てきて、ポイントがどのくらいになるか、ポイントを重ねていくと、何か割引になるとかのをやると面白いよねという話を商工部としています。
- 教育委員（村谷 要） 是非、柔軟な仕組みを。

- 市長（櫻田 宏） 意見がいっぱい出てくると、楽しい街中になっていくと思っています。
- 教育委員（伊東 重豪） そこ広場もありますからね、夏とかはイベント出来るし、広場で使えるかもしれないですね。
- 教育委員（村谷 要） 爺ちゃんから子どもまで、みんなで楽しめる。
- 市長（櫻田 宏） なんか面白い仕掛けができるといいなと思いますね。
- 教育長（吉田 健） ほんとに堅いのだけだったらちょっと飽きちゃうから、柔らかいのも入って、笑いもあり、楽しみながらっていうのがいいですね。
- 市長（櫻田 宏） 是非、子どもの健康から言うと、歯が大事。どうしても内科的にいくと、肥満なんですけど。
- 教育委員（伊東 重豪） まあ、いろんな病気の走りになっていたり、糖尿病に関連あるというのもありますので、一つの病名つけるだけで、肥満も歯もだし、全身的に見ていってということで、良いんじゃないかと思います。歯も非常に重要だと思います。
- 市長（櫻田 宏） 学校の中でもそうだし、日頃から話してもらえればなと思います。
- 教育長（吉田 健） フッ化物洗口も広がってきています。うがいをして、歯の健康を意識させるという効果も十分高いんじゃないかなと思います。
- 市長（櫻田 宏） 3つ目の不登校・不登校傾向にある児童生徒への対応について、皆さんからご意見をいただきたいと思います。
- 教育長（吉田 健） 不登校というと、文科省のほうで発表されてるんですが、実際は定義があって、30日以上欠席した児童生徒ということなんです。いきなり30日になる子どもはいないわけで、その前の前兆の段階で、把握するのが必要だろうということで、今年教育センターの方で、予備軍という形で不登校傾向の生徒も把握するというのもやっています。だいたい1.5倍ぐらいなんですね。まず把握するところ、それから実際教育センターは長年、フレンドシップルームで、不登校の生徒の扱いをノウハウいっぱい持っていますので、いろいろな相談や各学校が教育支援センター機能というふうに、校内教育支援センター機能というような言い方をしますが、学校が機能を持つというような形で、教育委員会、学校、教育センターがしっかり取り組んでいこうと進めてるところです。
- 市長（櫻田 宏） 市の教育委員会でいろいろと取り組んでいるんですが、皆さんに聞きたいのは多様化学校についてです。市内のある専門学校で、それをやっていこうという意向があるようです。実際、教育委員会でいろんな話をしていると、じゃあどうなのか。むつ市は市立ですが。多様化学校というのは、本当に学校としていいのかどうか。今はフレンドシップルームをはじめ、いろ

んな形で学校の中でそれぞれが動いていて、先生方には相当負担がかかっていると思うんですけど、子どもにとっては、そういう環境の中で、いろんな人たちがいる中で、それぞれが触れ合って育っていくというふうになってるかと思うんです。弘前の教育委員会はそうしてると思うんですけど、新しく多様化として、新しい学校として持つべきかどうか、私ちょっと、判断できないでおりました。

○教育長(吉田 健) 考え方というのは、やっぱりそういう専門の学校となると、「あそこに行った生徒なんだ」と、差別などに繋がるんじゃないかなということと、実際調べてみると、学びの多様化学校でやれることというのは、教育センターでやってることと、ほとんど同じなんですね。ですから、センターでやってることが、例えばむつ市は、弘前みたいなセンターが無いので、そういう風な形で補うことが大事なんだと思うんですが、弘前の場合には、教育センターのフレンドシップルームが、ほとんど同じ機能で、それプラス、学校ともいろいろ交わりながらやる方法をとっているの、隔離するっていうのは、あえて必要なのかなと。市単独で、市立でやるっていうのはあれなんです、私立でやるっていうのは、子どもたちの選択肢、親の選択肢が増えるっていうのは、もちろん大歓迎なんですけれども、市でやるっていうのは、あえてそこは教育センターのほうに、まず相談くださいというような、一本化したほうがいいんじゃないのかなという考えがあって、いろんな意見があるかと思いません。

○教育委員(伊東 重豪) フレンドシップルームすごくいいと思うんですけど、あそこの本来の目的として、やっぱり学校に返してあげて、復学率が何パーセントとかで、要員のほうも、フレンドシップルームだとある程度割いているんですけど、フレンドシップルームという目的なので、そんなにきちんとした教育まで完成できる環境かというところちょっと懸念があって。私も最初考えたフレンドシップルームから学校に戻さず、フレンドシップルームだけで独立して、そこで最後までやっていっていいんじゃないかと思って考えると、それがいわゆるその他で政府も進めている多様化学校みたいな形、聾学校がなんか今後はどんどん多様な形って、更にもっと出てくると思うんですよね。そうした中で、フレンドシップルーム的な一次的な入れ物ではなくて、長期的なことも考えて、そこできちんと卒業する。多様化してくるとある程度片寄った特徴というか特性というか、あとはすごくできる点とかもあるので、そういったものをそこで見つけて、早めに伸ばしてあげて。じゃないとそういう子というのは、社会に出て何もできなくなっちゃうんですよね。そういう時点でその子の特性見つけて、ある程度重点的教育みたいな形で世に出してあげれば、そういったいわゆる発達障害の子でも、今後生きていく場

所がきちんと自立でできるようなそんな学校があれば、希望ですよ。良いなと思って、フレンドシップルームの発展型でこの多様化学校を捉えるんです。たまたますごく良いこと。ただ最初フレンドシップルームって不登校の子が行きますよね。最初から学校作るんだったら、どうなるのかな。不登校の子が行ってフレンドシップルームができてるんですけど、そういうところがちょっと課題なのかなとも思うんですけど。どんどんこの先増えてくるので、弘前で先進的にその取り組みってすごく良いですし、評価もされてるし、復学率もあるので、何かもう少し発展させていい形に持っていけないかなと思っておりました。

○教育長（吉田 健） 実際のフレンドシップルームの復帰率は、小学校から中学校に上がった時とか、中学校から高校に上がった時が、非常に復帰率が高いわけで、だから実際、フレンドシップルーム卒業みたいな形で、という子どもたちも結構います。私、定時制の高校に勤めていた時には、フレンドシップルームから来て、学校には全然行ってないけど、フレンドシップルームには通ってるという子も。だから実質、フレンドシップルームが自分の母校なんですよね。そういう風な子どもたちも結構いました。

○教育委員（伊東 重豪） フレンドシップルームがそうであれば、そこである程度の能力というか、学力を付けさせて、そこまでいけば、すごくなんか良いんじゃないかなと思います。

○教育長（吉田 健） 個別の指導計画とかもセンターの方で作ってますので、やっぱりそういう形で、その子に合った形で、無理くりこれやれ、あれやれっていうと、またフレンドシップルームにも来なくなってしまうので、少しずつ、ステップで、少しずつ上げていくということでやっていますので、新しく多様化学校出来たとしても、フレンドシップルームと同じような形で進めていかなければならないのであれば、それだったら、力を分散させるよりは、一つに集中させるほうがいいかなぐらいには思ったりしてるんですけどね。

○教育長職務代理者（日景 弥生） 伊東先生の発想はすごく面白いなと思ったんですけど、まず教育センター、私はほんとに良くやっていると思っているんです。弘前市立なんとか小学校とか、弘前市立なんとか中学校っていうのは、公教育と言われているんですね。小中学校は義務教育ですから、学習指導要領とかも、中学校はかなり変わって、国民としての資質を育成するところだっていう位置づけになっているので、先ほども話題提供で、知識理解をはじめ、こういうことを9年間でやるんだよっていうふうになっているんですね。かなり自由度が高い、子どもたちの自発性だとか、意欲だとかを勘案するのであれば、一部授業、例えば総合的な学習の時間なんかは、それに若干関わる場所あると思いつつも、実際には高校以降じゃないと、ちょっとそれは難

しいんじゃないかなと。日本国民としての資質を育成という観点で、9年間の義務教育が成っているということは、その中で子どもたちがいろんなことを知ったうえで、自分の特性だったり、興味関心だったり、その次のステップで伸ばしてもらおう準備段階かなと、私は思っているんですね。だから、高校進学の際に、興味関心とか特性を生かせる高校を選択するという事に繋がれば、小学校・中学校としてはすごくいいかなと思っています。

○市長（櫻田 宏） 弘前はフレンドシップルームをしっかりとやって、今の体制の中でやってるんだけど、今後はこのような場で、いろんな機会を議論を重ねて、皆さんの意見はどうなのかと。地域の方々がこういうのが必要だということになれば、それはどういう形なのかもしっかり見極めながら、実際に動ければいいのかな。

○教育長職務代理者（日景 弥生） 最後に言いたいことがあって、この話題提供3つに、全てに関わるところなんですが、話題提供3の所で明記されていますけど、やっぱり、教員のマンパワーが足りないんですね。例えば不登校の子どもたちにもっと手厚く支援をしたいという思いが、たぶん多くの先生方思っているし、同じようにさっきの健康のベジチェックとかも、同じようにあるし、学ぶ力についても、あると思うんですね。だけど現実には、先生たちがまずは確実に100パーセント確保されていないということもあります。今の定数だとちょっと無理なんじゃないかという気がしてるんですね。だから、弘前市全体で解決できることではないかもしれないけど、もっと積極的に、もっと先生たちを増やして子どもたちをちゃんと育てようよっていうふうに、持っていけないかなと思うのが一つと、教育免許がなくても出来る仕事が、学校現場にはたくさんあるので、そういう、教育免許がなくても出来る仕事を、やってみたいという方がいたら、採用するっていうのはどうかなと思います。とりあえずできるところからお願いしたいと思います。

○教育長（吉田 健） 教員の数、教員の枠は、市町村でなく国なので、県も決められないくらいのことなのでなかなか難しいんですが、支援員というのは、必ずしも免許がなくてもできる仕事が学校に多いので、可能な限り増やしていくのは手だと思います。

○市長（櫻田 宏） 予定の時間を過ぎました。意見交換の場ということで、教育委員会の職員も、意見を共有しましたので、今後生かしていきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○教育部長（森岡 欽吾） それでは、これを持ちまして令和7年度弘前市総合教育会議を閉会いたします。大変お疲れさまでした。

午後4時10分 閉会